

令和6年度 第3回郡山市学校教育審議会 会議概要録

1. 開催日時及び会議出席委員

開催日時	令和7年2月3日（月） 午後1時30分から午後3時00分まで
出席委員	【委員9名中7名出席】 富田 孝志委員（会長）、橘 文紀委員、小山 健幸委員、橋本ゆかり委員、橋本 裕委員、瀧田 勉委員、相樂 悦子委員

2. 会議の概要

会議次第	会議の概要
1 開 会	・ 定刻（午後1時30分）開会。 ・ 本日の会議は委員9名中、7名出席であり、過半数を超えているため、郡山市学校教育審議会条例第6条第2項より、会議は成立していることを報告。
2 教 育 長 あ い さ つ	・ 1月24日に開会した第217回通常国会では、令和7年度政府予算案が審議されており、文部科学省では、「質の高い公教育の再生」、「新しい時代の学びの実現に向けた学校施設の整備」、「高等教育機関の多様なミッションの実現」及び「誰もが学ぶことができる機会の保障」という大きく分けて4つの柱からなる教育関係予算案を提出しており、小学校5、6年生で実施している教科担任制を4年生への拡大のほか、不登校やいじめに対応する生徒指導担当教員を中学校へ配置することを進めることなどが盛り込まれている。 ・ また、令和8年度から中学校で「35人学級」を実現する方針も示され、国会審議とともに今後実施に向けた必要な法改正等が進められるものと認識している。 ・ 一方、昨年12月に、文部科学大臣から、学習指導要領の全面改定について、中央教育審議会に諮問したところであり、審議会では令和8年中の答申を目指して議論していくことになり、新要領に基づく授業は令和10年度から順次開始される見込みである。 ・ この諮問では、多様な背景を持つ子どもを包摂するため、各学校や教育委員会の創意工夫を引き出す「柔軟な教育課程」が必要であると指摘しており、各教科の標準授業時数や授業時間、学習内容の学年区分について、学校現場の裁量を広げる方向で検討するよう求めており、その上で、教員の勤務環境を考慮し、現在以上に増加させないことを前提に、年間の標準総授業時数のあり方や、デジタル学習基盤の活用を念頭に教科書の内容や分量を見直すべきであるとも諮問されている。 ・ 国も次年度より本格的に令和の教育改革に踏み出すことから、本市においても、本市独自の新たな視点で教育を推進する必要性が一段と増してきているものと認識しているところである。 ・ 本日は「教育課程特例校（プログラミング教育）についての中間まとめ」についてご審議をいただくことになっているが、これは今年度の審議事項のまとめとなるものであり、次年度の審議課題を提起するものでもある。 ・ 1月に実施された大学入学共通テストでは、現行の学習指導要領対応に伴

	う教科・科目の再編により、初めて導入された教科である「情報」の試験が実施されており、デジタル学習基盤の効果的な活用による情報活用能力の育成、情報モラルやメディアリテラシーの育成強化を図りながら、質の高い探究的な学びを一体的に実現するためにも、このプログラミング教育のあり方は、本市においてもより重要性を増すものと考えている。 ・本市の教育基本理念である「ともに学び、ともに育み、未来を拓く教育の創造」の実現に向け、委員の皆様には、本市教育行政発展のために、本会議において忌憚のない御意見を賜りますようお願い申し上げます。
3 審 議 事 項	【審議事項】 (1) 「今後の本市の教育課程特例校（プログラミング教育）のあり方について」中間まとめの骨子（案） ● 事務局説明後、質疑応答。 ● 質疑応答なし。 (2) 「今後の郡山市の教育課程特例校（プログラミング教育）のあり方について」 中間まとめ（案）の概要 (3) 「今後の郡山市の教育課程特例校（プログラミング教育）のあり方について」中間まとめ（案） ● 関連する内容であるため、(2) 及び (3) を事務局で一括説明後、質疑応答。 Q： プログラミング教育については、小学3年生から中学3年生まで年間10～15時間学んでいくということだが、どのような流れで進んでいくのか。 また、プログラミング教育の習熟度などが、学校によって差が出ることなく、分け隔てなく学ぶことができる環境づくりに努めてほしいと思う。 A： 本市としては、学校による格差が出ることがないように、プログラミング教育の学習指導指針を作成するとともに、授業を実施するにあたり教育委員会で教材を用意している。 また、教育研修センターで教員向けの研修も実施し、同じ水準の授業ができるようにしている。 課題としては、小学校中学校9年間を見通した指導をし、小学校から中学校の学びをつなげていけるようにしていくことである。 A：（委員より補足説明） 現場の対応について少し補足する。 小学校ではローテーションでロボット教材が配置されるので、その時期に合わせ、10～15時間という幅の中で総合的な学習の時間の使い方を考えて、年間の学習の計画を立てる。 また、プログラミング的思考を育てることが大事であるため、ロボットを扱うところだけではなく、それを動かすために何を考えるかということがポイントである。 これまでの数年間で、教員も最初は不安感があったと思うが、指導しやすい環境が整っているので、ある程度同水準の指導ができている実感はある。 Q： プログラミング教育において、4年間の振り返る機会を設けて、評価が見える化することが必要と思われるが。

	A： 今後それも含めて検討したい。 Q： 低学年(1、2年生)の対応はどうなっているか。低学年からプログラミング教育に触れていくと、さらに効果的な学びにつながるのではないかと思う。 A： 1、2年生も学級の裁量により、全学年が使えるプログラミング教材を使いながら、遊び感覚でプログラミングに触れることができる。 ～休憩後、再開～ 【質疑応答以外の委員からの主な意見】 ➤ アンプラグド教材の「アンプラグド」は商標登録されているため、別名称（例えばプラグレス）での呼称にすべきである。 ➤ 令和2年から始まったため、当時小学校6年生が現在高校1年生である。プログラミング教育を小学校から学んできた子どもたちが高校を卒業するまであと数年あるため、小学校で基礎を作ってきた子どもたちが、それを中学校、高校と継続して学び、どのような成果につながるかももう少し様子を見ながら評価するのが良いと思う。 ➤ 低学年の保護者向けに、どんなことを学んでいるか、どのような趣旨で授業などを行っているかなどを説明してもらうのはどうか。 ➤ 親の授業に対する理解が高まり、家庭の学習でそれが膨らんでいくと良い影響が出るのではないかと思う。 ➤ それはとても良い考えかと思う。ぜひ提言の中に盛り込むべきである。 ➤ 近年のデジタル化に伴い、紙のテキストをできるだけ使わず、どの学校においても差が出ることなく、タブレット主体の授業ができると良いかと思う。 ➤ 紙のテキストを使ってしまうと、それをベースにした授業になってしまうので、主体性に欠けてしまうと思われるが、タブレットをメインに使うことで、参加型の授業を作り上げやすくなると考える。 ➤ さらにタブレットを活用した良い授業のモデルを他の学校にも共有すれば、学校間の格差が埋まっていくのではないかと思うので、ぜひそのような取り組みの検討をお願いしたい。 ➤ デジタル化に関連して、SNSの利用と情報モラル教育については重要な内容であるので、そちらも提言に盛り込みたいと考えている。 ※ 審議事項については、すべて了承された。
4 そ の 他	● 今後の「中間まとめ」取りまとめまでのスケジュール等について ・ 事務局説明後、質疑応答。 ・ 質疑応答なし。 ・ 今後、各委員からご意見をいただき、中間まとめとすることで了承。
5 閉 会	・ 午後3時00分閉会。